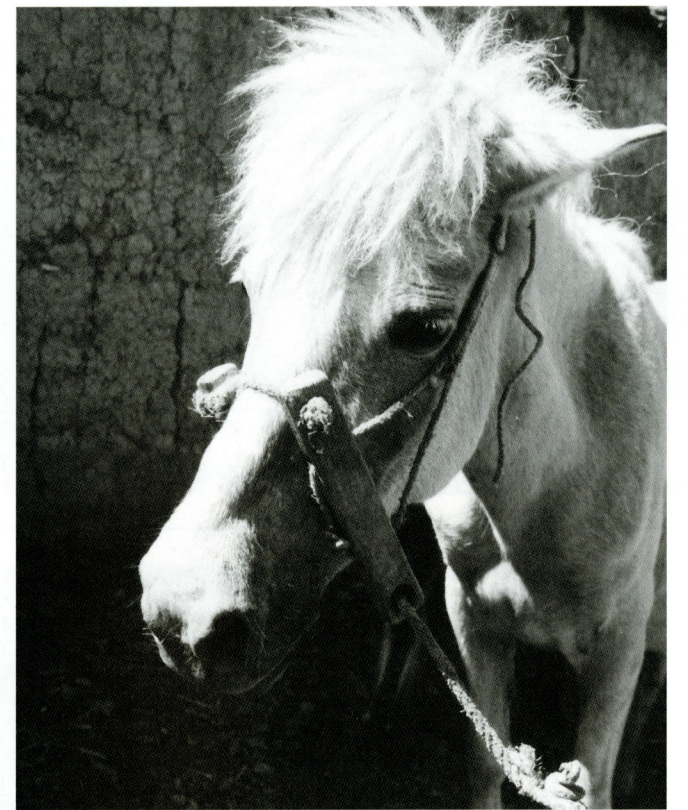


中国四川省の自治州で撮影した馬
体高110センチメートルほどの小型馬。棒締頭絡をつけている



モノ グラフィ

棒締頭絡

小島 摩文(こじま まふみ)

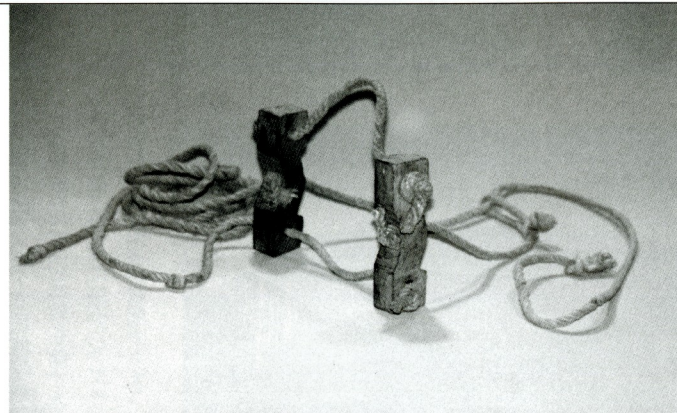
鹿児島純心女子大学准教授

がなく、これだけは「轡」という文字から馬の制御具であろうと推測できるだけである。しかし「鞍および付属用具」の方は鞍や鞍敷などといったしよに制御具が収集されており、明らかに馬具だとわかる。これが「轡一雙二箇」と同じように動物の角製で機構もよく似ていることから、「轡一雙二箇」も馬の制御具の一部だということの傍証となる。

博物館の収蔵庫には来歴がよくわからない資料がたまにある。特に小さな町の歴史資料館などでは資料カードがないことも多い。また高度成長期をへた昭和四〇年代ぐらいいから農村でも家の建替えがすすみ、使われなくなつて納屋や床下、屋根裏などに保管された農具などの民具をとにかく集めるだけ集めたという自治体も多く、未整理の資料を廃校舎などに集めてあるだけの資料というのはいくつか見てきた。

そんな資料のなかにもわくわくするような資料がある。それらを調査することをわたしは密かに「収蔵庫考古学」とよんでいる。実物の資料とわずかな手がかりからその「モノ」が何かを導き出していく「学問」だ。そうした小さな鍵がまたフィールドへの手がかりとなりわたしたちを導いてくれる。

棒締頭絡



中国雲南省
原野農芸博物館の現館長・原野耕三氏による収集



喜界島
(標本番号 H18582~H18586)



中国四川省
チベット族が使用(標本番号 H 148384)



「轡一雙二箇」
中国内モンゴル自治区蒙古人が使用
(標本番号 H25150)

みなさんは「棒締頭絡」という馬具をご存じだろうか。日本ではおもに琉球列島で使用され、ウムゲー、ムゲー、ンゲーとよばれている。民俗学者の下野敏見先生が精力的に調査・研究されていた馬具だ。民具研究者のあいだでは長く沖縄県と鹿児島県の一部での事例が知られているだけであつたが、後に北海道でも遅くとも江戸時代から棒締頭絡が使用されていたことがわかつてきた。北海道では一般に「ヒョウシ」とよばれている。

馬を制御する道具としては一般にハミがよく知られている。ハミは馬の口のなかに金属製の棒をかませて馬の口角を刺激することで制御する方法である。また、馬を厩舎につないだり、乗馬せずに馬を引いて移動させる際には、無口頭絡とよばれるハミの付いていない頭絡が用いられる。

棒締頭絡はハミとも無口頭絡ともちがい、二本の木片を馬の鼻梁部にかかけ、もう一方の端に手綱をとおす構造になつている。手綱を引くと木片が締まり馬を制御する仕掛けとなつている。

下野敏見先生は一九七〇年代から、大陸部(東アジア・東南アジア)でも棒締頭絡が使用されていたはずだと仮説を立てていたが、証拠は見つからなかつた。

ところが、一九九四年に、奄美大島にある原野農芸博物館が収集した中国雲南省の資料のなかに棒締頭絡が含まれていた。当時、原野農芸博物館に勤務していたわたしは、その翌年中国四川省涼山イ族自治州とタイ北部の少数民族の村を調査し、棒締頭絡を探し求めた。そしてめぐりあつたのが上記の馬の写真にある棒締頭絡である。

帰国したわたしは報告書を書くために日本国内のさまざまな博物館に連絡をとり、棒締頭絡について尋ねた。民博にも喜界島出身の民俗学者・岩倉市郎氏が収集した喜界島の棒締頭絡「ウムエー」があることがわかつた。欲を出したわたしは民博の検索システムを使い「馬」「ウマ」をキーワードに検索し、写真のある資料は写真で、写真のない資料は収蔵庫で現物を見ることにした。

なかでも「馬」という標本名の資料が数点あり興味を引いたが、結局すべて馬の人形であつた。

こうして調べたなかから「轡一雙二箇」と「鞍および付属用具」を見つけ出し、棒締頭絡と確認した。「轡一雙二箇」は、騎馬民族征服説で有名な江上波夫氏が一九四一年に中国内モンゴル自治区で収集した物である。使い方に関するデータ